

学科到達目標

広範な融合複合技術と高度な専門知識をもとに社会情勢に対応して継続的に成長できる実践的開発型技術者の養成を目的として、下記の能力の育成を掲げています。

① 自ら考え、計画し能力を総合的に発揮して問題を解決できる能力
 ② 専門分野に加えて基礎工学をしっかり身につけた生産技術に関する幅広い対応力
 ③ 英語力を含めたコミュニケーション力
 ④ 多様な価値観を理解し地球的視野をもつ豊かな教養と人間性

この教育方針に基づき、学生が達成すべき7つの学習・教育到達目標 (A) ~ (G) を設定しています。

科目区分	授業科目	科目番号	単位種別	単位数	学年別週当授業時数																				担当教員	履修上の区分	
					1年				2年				3年				4年				5年						
					前		後		前		後		前		後		前		後		前		後				
					1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4			
専門	必修	応用解析特論	0016	学修単位	2			2																		三浦 崇	
専門	必修	固体物理学	0017	学修単位	2			2																		大西 宏昌	
専門	選択	材料力学特論	0018	学修単位	2	2																				三村 泰成	
専門	選択	流体機械	0019	学修単位	2			2																		矢吹 益久	
専門	選択	レーザー応用計測	0020	学修単位	2			2																		宮崎 孝雄	
専門	選択	集積回路設計	0021	学修単位	2	2																				佐藤 淳	
専門	選択	伝送システム工学	0022	学修単位	2			2																		保科 紳一郎	
専門	選択	工業分析化学	0023	学修単位	2	2																				戸嶋 茂郎	
専門	選択	ゲノム工学	0042	学修単位	2			2																		斎藤 菜摘	
専門	選択	塑性加工学 (1, 2年)	0043	学修単位	2			2																		本橋 元	
専門	選択	反応速度論 (1, 2年)	0044	学修単位	2			2																		飯島 政雄	
専門	選択	生物資源利用化学 (1, 2年)	0045	学修単位	2	2																				飯島 政雄 松浦 由美子	
専門	選択	制御工学特論	0062	学修単位	2				2																	中山 敏男	
専門	選択	電磁気応用工学	0063	学修単位	2				2																	保科 紳一郎	
専門	選択	信号処理特論	0064	学修単位	2				2																	武市 義弘	
専門	選択	音響工学	0065	学修単位	2				2																	柳本 憲作	
専門	選択	計算機システム	0066	学修単位	2					2																佐藤 淳	
専門	選択	センサ工学	0067	学修単位	2						2															神田 和也	
専門	必修	材料科学	0068	学修単位	2				2																	粟野 幸雄	
専門	必修	実践電気電子工学	0069	学修単位	2				2																	渡部 誠二	
専門	必修	基礎工業力学	0070	学修単位	2				2																	本橋 元	
専門	選択	材料設計学	0071	学修単位	2				2																	五十嵐 幸徳	
専門	選択	シミュレーション工学	0072	学修単位	2																					西山 勝彦	
専門	選択	高分子材料化学 (1, 2年)	0261	学修単位	2				2																	佐藤 司	

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	応用解析特論		
科目基礎情報							
科目番号	0016	科目区分	専門 / 必修				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	1				
開設期	後期	週時間数	2				
教科書/教材	新訂 応用数学 高遠節夫 他 (大日本図書)						
担当教員	三浦 崇						
目的・到達目標							
複素数変数の微分・積分の初歩を理解し、実関数の積分に応用することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	コーシー・リーマンの関係式を用いて、正則関数であることを示せる。	複素微分を理解し、その基本的な計算ができる。	複素微分の基本的な計算ができない。				
評価項目2	コーシーの積分定理・表示を用いて複素積分の計算ができる。	複素積分を理解し、基本的な計算ができる。	複素積分の基本的な計算ができない。				
評価項目3	留数定理を理解し、実積分の基本的な計算に応用できる。	孤立特異点の概念を理解し、留数の計算ができる。	留数の計算ができない。				
学科の到達目標項目との関係							
(C) 数学, 自然科学の基礎学力と実験・実習による実践力を身につける。 C-1							
教育方法等							
概要	本科で学んだ複素数, 実数変数の微分・積分の内容を基に, 複素数変数の微分・積分の初歩を学習する。						
授業の進め方と授業内容・方法	基本的事項や論理的内容を講義で説明し, 応用については演習で学習する。演習を行う際には, 初めに例題について解説し, そのあとに類題やより高度な問題に取り組んでもらう。						
注意点	定期試験40%, 定期外試験30%, レポート20%, 授業への取り組み10%で評価し, 総合評価60点以上を合格とする。各試験においては達成目標に即した内容を出題する。試験問題のレベルは授業で取り扱った問題と同程度とする。						
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
後期	3rdQ	週	授業内容・方法	週ごとの到達目標			
		1週	複素数・複素平面	複素数の基本的な計算ができる。複素数の幾何学的意味を理解する。			
		2週	複素関数	複素関数の概念を理解する。基本的な複素関数を理解する。			
		3週	指数関数・三角関数	指数関数・三角関数の計算ができる。			
		4週	複素微分	正則関数, コーシー・リーマンの関係式について理解する。			
		5週	コーシー・リーマンの関係式の応用	コーシー・リーマンの関係式を使いこなせる。			
		6週	複素積分	複素積分を理解する。			
		7週	複素積分の性質	複素積分の性質を理解する。			
	8週	定期外試験					
	4thQ	9週	コーシーの積分定理	コーシーの積分定理を理解する。			
		10週	コーシーの積分表示	コーシーの積分表示を理解する。			
		11週	正則関数の級数展開	テイラー展開とローラン展開を理解する。			
		12週	留数定理	留数定理を理解する。			
		13週	留数定理による複素積分	留数定理を使って複素積分できる。			
		14週	実積分への応用	複素積分を実積分の計算に応用できる。			
		15週	演習	演習問題でこれまでの内容を再確認する。			
16週							
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	10	0	20	100
基礎的能力	70	0	0	10	0	20	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	固体物理学
科目基礎情報					
科目番号	0017	科目区分	専門 / 必修		
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2		
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	1		
開設期	後期	週時間数	2		
教科書/教材	キッテル固体物理学入門(上) 宇野良清他訳 (丸善)				
担当教員	大西 宏昌				
目的・到達目標					
量子力学・統計力学の知識を基に、固体中の電子と格子が織りなす多彩な性質についての基礎知識を習得する。					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安		
評価項目1	格子ベクトル・逆格子ベクトルについて理解し、種々の結晶について計算ができる。	固体の周期性について格子ベクトル・逆格子ベクトルを基に理解している。	格子ベクトルについて理解していない		
評価項目2	格子振動について理解し、簡単な系への適用が出来る。	2原子分子の格子振動の分散関係について理解している。	単原子分子の格子振動について理解していない。		
評価項目3	バンド理論に基づき物質の伝導性・磁性等について説明が出来る。	バンド理論に基づきエネルギーギャップについて理解している。	バンドギャップの起源について理解していない。		
学科の到達目標項目との関係					
(C) 数学, 自然科学の基礎学力と実験・実習による実践力を身につける。 C-1					
教育方法等					
概要	本科で学んだ物理, 応用物理および専攻科の物理学特論を前提に, 固体物理学の基礎知識の習得を目標とする。固体物性において本質的な結晶の周期性と凝集機構について学んだあと, 格子振動とその熱的性質, 自由電子近似を基にした固体のバンド構造について学ぶ。				
授業の進め方と授業内容・方法	板書とパワーポイントを用いた講義形式で行う。				
注意点	量子力学・統計力学については適宜適当な文献を紹介するので自的努力にて補う事。レポートは講義で学習した内容を基に, 発展的内容を含んだ課題を出す。				
事前・事後学習、オフィスアワー					
授業計画					
		週	授業内容・方法	週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	結晶の周期性と格子ベクトル	結晶の周期性・対称性について格子ベクトルを用いた数学的取り扱いができる。	
		2週	逆格子空間と逆格子ベクトル	逆格子空間について理解し, 格子ベクトルから逆格子ベクトルを求めることができ, またブリルアンゾーンの考え方を理解している。	
		3週	結晶の結合力: vdW結合・イオン結合	vdW結合エネルギーを調和振動子近似から導出できる。また, イオン性結晶のマードリングエネルギーを計算できる。	
		4週	結晶の結合力: 共有結合・金属結合・水素結合	水素分子の共有結合について理解し, 結合・反結合軌道について説明できる。また, 金属結合・水素結合について説明できる。	
		5週	格子振動(フォノン): 単原子結晶の振動	単原子結晶の格子振動の分散関係を求めることができる。	
		6週	格子振動(フォノン): 基本格子が2個の原子を含む場合	基本格子が2個の原子を含む場合の格子振動の分散関係を求めることができ, 音響的分枝と光学的分枝について理解している。	
		7週	フォノンの熱的性質	フォノンの比熱をデバイモデル, アインシュタインモデルに基づき計算でき, その特性について理解している。	
		8週	試験	1回目から7回目の学習内容について, 基礎的な事項をその数学的取り扱いを含めて理解している。	
	4thQ	9週	自由電子フェルミ気体	自由電子近似について理解し, フェルミエネルギー・状態密度の計算ができる。	
		10週	自由電子フェルミ気体の熱的性質	自由電子近似に基づいた電子系の比熱を求めることが出来, フォノンの場合との違いについて理解している。	
		11週	バンド理論とエネルギーギャップ	周期ポテンシャルによりエネルギーギャップが開く事を理解し, これに基づき絶縁体・半導体・金属の違いについて説明できる。	
		12週	半導体の物性: ホール・有効質量近似	半導体のバンド分散について, ホール・有効質量の概念を通じて理解している。	
		13週	半導体の物性: 不純物効果	半導体の不純物ドーピングについて, ドナー・アクセプターの概念を基に理解している。	
		14週	相転移と秩序変数	相転移について, 自由エネルギーと秩序変数を用いて理解しており, 一次相転移と二次相転移の違いについて説明できる。	
		15週	試験	主として9回目から14回目の講義内容について基礎的な事項をその数学的取り扱いを含めて理解している。講義で学んだ事項について, 全体を通して, 系統的な理解が出来ている。	
		16週			

評価割合				
	中間試験	期末試験	レポート	合計
総合評価割合	35	35	30	100
基礎的能力	20	20	15	55
専門的能力	10	10	10	30
分野横断的能力	5	5	5	15

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	材料力学特論		
科目基礎情報							
科目番号	0018	科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	1				
開設期	前期	週時間数	2				
教科書/教材	Professional Engineer Library 材料力学 本江哲行他 実教出版						
担当教員	三村 泰成						
目的・到達目標							
柱, 軸, 円筒, 球殻における組み合わせ応力を学び, 主応力, 主せん断応力の計算をできるようになる. また, それらを強度評価に適用できる. 弾性力学の基礎を学び, 有限要素法を用いた構造解析を理解し, 設計問題に適用できるようになる.							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	柱, 軸, 円筒, 球殻に生じる組み合わせ応力を計算し, 強度評価に適用できる.	柱, 軸, 円筒, 球殻に生じる組み合わせ応力を説明できる.	組み合わせ応力を理解できない.				
評価項目2	2次元有限要素解析を用いた構造解析を実現でき, 強度評価に適用できる.	有限要素解析を説明できる.	有限要素解析を理解できない.				
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち, 生産技術に関する幅広い対応能力を身につける. E-1							
教育方法等							
概要	組み合わせ応力を学び, 主応力, 主せん断応力の計算をできるようになる. また, それらを強度評価に適用できる. 弾性力学の基礎を学び, 有限要素法を用いた構造解析を理解し, 設計問題に適用できるようになる.						
授業の進め方と授業内容・方法	中間試験 (40%) 期末試験 (50%), 自学自習のための課題 (10%) により評価し, 60点以上を合格とする. 期末試験には, 「有限要素解析を実行し結果の報告書作成する」という問題を含む.						
注意点							
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
	週	授業内容・方法	週ごとの到達目標				
前期	1stQ	1週	ガイダンス, 材料力学の復習.	ガイダンス			
		2週	主応力, 主せん断応力	二次元問題 (平面応力, 平面ひずみ) における主応力, 主せん断応力などを理解し, 計算できる.			
		3週	柱	長柱の座屈理論を理解し, 座屈荷重を計算できる. 偏心圧縮作用する短柱の計算を理解し, 計算できる.			
		4週	曲げ, ねじり, 軸力が作用する軸	軸における組み合わせ応力を理解し, 計算できる.			
		5週	薄肉円筒, 球殻	薄肉円筒, 球殻における組み合わせ応力を理解し, 計算できる.			
		6週	弾性破壊の法則	最大主応力説, 最大せん断応力説, せん断ひずみエネルギー説を理解し, 材料破壊の評価基準として利用できる.			
		7週	演習				
		8週	中間試験				
	2ndQ	9週	有限要素法 (1)	連続体力学の概要を学び, 物理現象を「偏微分方程式」で記述できることを理解できる.			
		10週	有限要素法 (2)	弾性力学におけるひずみの定義, 平衡方程式を理解できる. フックの法則との関係も理解できる.			
		11週	有限要素法 (3)	一次元バネ問題をマトリクス法を用いて解ける.			
		12週	有限要素法 (4)	1次元2節点棒要素の有限要素法の定式化を学び, 有限要素法の計算手順を理解する.			
		13週	有限要素法 (5)	2次元の4節点アイソパラメトリック要素を学び, 応力解析に適用できる.			
		14週	有限要素法 (6)	2次元要素, 3次元要素を用いた有限要素解析の例題を実行し, 結果を検証できる.			
		15週	有限要素法 (7)	与えられた課題について有限要素解析モデルを構築し, 解析, 強度評価が実行できる.			
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	90	0	0	10	0	0	100
基礎的能力	10	0	0	10	0	0	20
専門的能力	80	0	0	0	0	0	80
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	流体機械		
科目基礎情報							
科目番号	0019	科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	1				
開設期	後期	週時間数	2				
教科書/教材	ターボ機械－入門編－、ターボ機械協会、日本興業出版						
担当教員	矢吹 益久						
目的・到達目標							
<p>流体力学の基礎理論が説明でき、法則の導出ができる。 設備システムに適合する水力機械の選定について説明ができる。 空力機械の種類・特徴を理解できる。</p>							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	流体力学の基礎理論が説明でき、法則の導出ができる。	流体力学の基礎理論に基づき数式を用いて計算ができる。	左記ができない。				
評価項目2	設備システムに適合する水力機械の選定ができる。	水力機械の選定に関わる計算ができる。	左記ができない。				
評価項目3	空力機械の種類・特徴を理解できる。	空力機械の種類を理解できる。	左記ができない。				
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	日常生活や企業の製造現場で使用されている流体機械について、それに関わる流体力学の理論を理解し、利用目的に適した流体機械の選択と運用の方法を理解し、知識を設備設計に活用可能とする。						
授業の進め方と授業内容・方法	教科書の読解、内容の解説、例題の演習とその解説にて進める。 授業内容は、授業計画に示す通り。						
注意点	特になし。						
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
	週	授業内容・方法	週ごとの到達目標				
後期	3rdQ	1週	流体の性質、連続の式とベルヌーイの定理	流体の性質、連続の式とベルヌーイの定理を理解し、説明または計算ができる。			
		2週	運動量の法則および流れとエネルギー損失	運動量の法則および流れとエネルギー損失を理解し、説明または計算ができる。			
		3週	流体機械の基礎－1	流体機械の分類とエネルギー変換について、説明または計算ができる。			
		4週	流体機械の基礎－2	流体機械の構成要素について、説明または計算ができる。			
		5週	相似則と比速度、キャビテーションとサージング	相似則や不適合要因について、説明または計算ができる。			
		6週	ポンプ－1	ポンプの性能と構造について、説明または計算ができる。			
		7週	ポンプ－2	ポンプの選定と保守管理について、説明または計算ができる。			
		8週	水車および流体継手	水車および流体継手について、説明または計算ができる。			
	4thQ	9週	中間試験	第1週から第8週の内容について、説明または計算ができる。			
		10週	送風機	送風機について説明ができる。			
		11週	送風機	送風機について説明ができる。			
		12週	圧縮機	圧縮機について、説明ができる。			
		13週	風車	風車について、説明ができる。			
		14週	風車	風車について、説明ができる。			
		15週	真空ポンプ	真空ポンプの構造について、説明または計算ができる。			
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	10	0	10	0	10	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	10	0	10	0	10	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	レーザー応用計測
科目基礎情報					
科目番号	0020		科目区分	専門 / 選択	
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	1	
開設期	後期		週時間数	2	
教科書/教材	光・レーザー工学入門 博士(工学)中野人志 著 コロナ社				
担当教員	宮崎 孝雄				
目的・到達目標					
<p>レーザーは光通信, 家電製品, 情報処理機器, レーザ加工, 医療分野など産業界広く利用されている。ここでは, レーザの応用に必須であるレーザーの基本的性質, 発振原理, 種類や特徴を理解した上で, レーザを応用した各種装置やシステムなどの動作原理と特徴を習得し, レーザが担う役割の重要性と多様性について理解を深めてレーザーを応用した新しい機器や技術開発に向けての基礎力を身につけることを目標とする。</p>					
ループリック					
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安
評価項目1	自然光と異なるレーザー光の特徴を光学および量子論の知識に基づいて定量的に説明できる。		自然光と異なるレーザー光の特徴を光学および量子論の知識に基づいて定性的に説明できる。		自然光と異なるレーザー光の特徴が説明できない。
評価項目2	各種レーザーの発振原理及び特徴を光学および物理の理論を利用して定量的に説明できる。		各種レーザーの分類, 構造, 発振原理及び特徴を定性的に説明できる。		各種レーザーの分類, 構造, 発振原理及び特徴を説明できない。
評価項目3	各種レーザーを応用した装置やシステムの原理, 構成, 特徴及び性能について定量的に説明できる。		各種レーザーを応用した装置やシステムの原理, 構成, 特徴及び性能について定性的に説明できる。		各種レーザーを応用した装置やシステムの原理, 構成, 特徴及び性能について説明できない。
学科の到達目標項目との関係					
(E) 一つの得意専門分野をもち, 生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1					
教育方法等					
概要	レーザーの応用において必須であるレーザー光の特性, レーザーの動作原理及び種類などについて理解するために, 光学および量子力学の基礎知識に基づいて解説する。また, 各種レーザーを応用した最新の装置やシステムの動作原理, 特徴をわかり易く説明する。				
授業の進め方と授業内容・方法	講義の進捗状況に応じて, 小テストあるいはレポート提出を課して理解度を深める。達成度を評価するために, 中間試験と期末試験試験を実施する。授業は, 講義が主体となる。成績評価は, 試験成績, 小テストおよびレポートを総合評価して行う。				
注意点	成績評価の割合は, 中間試験40%, 後期末試験40%, 小テストおよびレポート20%で総合評価し, 60点以上を合格とする。試験問題は, 到達目標に則した内容とする。				
事前・事後学習、オフィスアワー					
授業計画					
		週	授業内容・方法	週ごとの到達目標	
後期	3rdQ	1週	波動光学の基礎と光の粒子性	光の反射・屈折, 回折, 干渉, 偏光, 散乱について説明できる。	
		2週	光の粒子性と電子の相互作用	黒体放射, 光電効果, 不確定原理を説明できる。コンプトン効果を計算できる。	
		3週	発光メカニズム	電子の準位間遷移による光放射やエネルギーバンド間再結合による光放射について説明できる。	
		4週	レーザー光の基本的性質	指向性, 単色性, 可干渉性について説明できる。可干渉距離を導出できる。	
		5週	レーザーの原理	自然放出と誘導放出, 反転分布 光増幅器の利得, レーザ発振条件について説明できる。	
		6週	レーザーの原理 (続き)	光共振器, レーザ光の縦モード, 横モード, レーザ媒質の励起方法について説明できる。	
		7週	レーザー光の特性評価	連続発振, パルス発振のレーザー出力, ビーム品質, 集光径の測定方法が説明および計算できる。	
		8週	中間試験	レーザー光の基本的性質と発振原理 特性評価に関する理解度を評価する。	
	4thQ	9週	各種レーザーの特徴	気体レーザー, 固体レーザー, 色素レーザー, 半導体レーザーの構造と特徴について説明できる。	
		10週	各種レーザーの特徴 (継続)	エキシマレーザー, 光ファイバレーザー, X線レーザーの構造と特徴について説明できる。	
		11週	レーザー光内部制御技術	Qスイッチングおよびモードロック制御技術を理解し, 発振されたレーザー光の特徴を説明できる。	
		12週	レーザー光外部制御技術	高調波変換, 光音響光学素子, リレーレンズ系, 空間フィルタリングについて説明できる。	
		13週	レーザーの応用	光ディスクによる情報の記録・再生, 光計測, 光通信における技術的特徴について説明できる。	
		14週	レーザー加工	レーザー光の特徴を利用した精密加工や熱加工, 核融合技術について理解できる。	
		15週	後期末試験	各種レーザーの特徴と特徴を生かした応用に関する理解状況の評価を行う。	

		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	80	0	0	0	0	20	100
基礎的能力	20	0	0	0	0	10	30
専門的能力	50	0	0	0	0	10	60
分野横断的能力	10	0	0	0	0	0	10

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	集積回路設計		
科目基礎情報							
科目番号	0021		科目区分	専門 / 選択			
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	1			
開設期	前期		週時間数	2			
教科書/教材							
担当教員	佐藤 淳						
目的・到達目標							
システムLSI の重要性と問題点、システムLSI を構成する要素、システムLSI の下流工程の設計技術（動作合成、論理合成、レイアウト設計、検証）について講義する。 本講義は、株式会社半導体理工学研究センター 寄付講座の支援を受け、同講座の講義資料を使用する。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1							
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要							
授業の進め方と授業内容・方法							
注意点							
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
		週	授業内容・方法		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	システムLSI およびシステムLSI 設計フロー		システムLSI の実装、設計手順を説明できる。		
		2週	システムLSI 構成要素		システムLSI の構成要素とIP の役割について説明できる。		
		3週					
		4週	機能・論理設計		論理合成と動作合成の手法の概要を説明できる。		
		5週					
		6週					
		7週	機能・論理検証		検証技術の重要性、役割、手法の概要を説明できる。		
		8週					
	2ndQ	9週	レイアウト設計		簡単な論理回路のレイアウト設計ができる。		
		10週					
		11週					
		12週	低消費電力設計		低消費電力設計の重要性と低消費電力を実現する手法を説明できる。		
		13週					
		14週	テスト容易化設計		テスト容易化設計の必要性和手法を説明できる。		
		15週					
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	伝送システム工学		
科目基礎情報							
科目番号	0022	科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	1				
開設期	後期	週時間数	2				
教科書/教材							
担当教員	保科 紳一郎						
目的・到達目標							
1. 無損失空間における平面波の伝搬を式で表わすことができる。 2. 境界面に入射する反射、透過を式で表わすことができる。 3. 微小電流源の作るベクトルポテンシャルを求めることができる。							
ループリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	無損失空間における平面波の基本式を記述できる。	マックスウェルの方程式から波動方程式を導出できる。	マックスウェルの方程式から波動方程式を導出できない。				
評価項目2	反射率、透過率を導出することができる。	無限平面の境界面に入射する平面波の入射波、反射波、透過波を式で表わすことができる。	無限平面の境界面に入射する平面波の入射波、反射波、透過波を式で表わすことができない。				
評価項目3	ベクトルポテンシャルから電磁界を導出できる。	電流源の作るベクトルポテンシャルが説明できる。	電流源の作るベクトルポテンシャルが説明できない。				
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	本科で学ぶ電磁気学を基本として電磁波の特性について学ぶ。電磁波を表すマックスウェルの方程式について、その導出および単純かつ実用的な条件下での解法について講義する。平面波の伝搬、反射など電磁波工学の基礎となる事象について理解できることを目標とする。						
授業の進め方と授業内容・方法	授業携帯は講義が主体である。講義内容に関する課題を課す。期末試験(60%)、課題(30%)、出席状況(10%)として総合評価する。総合評価60点以上を合格とする。試験は各達成目標に則した内容の問題であり、講義や教科書の例題・章末問題と同程度とする。						
注意点							
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
		週	授業内容・方法	週ごとの到達目標			
後期	3rdQ	1週	マックスウェルの方程式(1)	マックスウェルの方程式の基盤となる電磁界の諸法則を示し、その微分形を理解できる。			
		2週	マックスウェルの方程式(2)	変移電流について理解できる。			
		3週	マックスウェルの方程式(3)	変移電流を含めたマックスウェルの方程式を理解できる。			
		4週	平面波の伝搬(1)	自由空間を伝搬する平面波の概念を理解できる。マックスウェルの方程式から波動方程式を導出する。			
		5週	平面波の伝搬(2)	波動方程式の表わす波動関数を記述できる。			
		6週	平面波の伝搬(3)	波動方程式の表わす波動関数から波長、位相速度を導出することができる。			
		7週	電磁波の伝播形態による分類	平面波、TEM波の違い、偏波での分類について理解できる。			
		8週	平面波の反射・透過(1)	TE波・TM波の関係を理解できる。TE波の入射波、透過波、反射波を式で表わす過程を理解できる。			
	4thQ	9週	平面波の反射・透過(2)	境界条件を使って、TE波の反射係数を導出する過程を理解できる。			
		10週	平面波の反射・透過(3)	境界条件を使って、TE波の透過係数を導出する過程を理解できる。			
		11週	電磁波の放射(1)	マックスウェルの方程式、ベクトルに関する諸々の定理からのベクトルポテンシャルの導出を理解できる。ベクトルポテンシャルと電界・磁界の関係を理解できる。			
		12週	電磁波の放射(2)	微小電流源の作るベクトルポテンシャルの導出が理解できる。			
		13週	電磁波の放射(3)	微小電流源の作るベクトルポテンシャルから電界磁界を導出する過程を理解できる。			
		14週	期末試験	授業内容を中心に試験を行う。			
		15週	テストの返却	テストの解答を解説する。自身の解答と模範解答を比べて、どこが間違ったかを理解する。			
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	0	0	10	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	60	0	0	10	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校	開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	工業分析化学
------------	------	-----------------	------	--------

科目基礎情報			
科目番号	0023	科目区分	専門 / 選択
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	1
開設期	前期	週時間数	2
教科書/教材	各教員作成の資料		
担当教員	戸嶋 茂郎		

目的・到達目標
 取り上げた各機器分析法について、測定原理および特徴、装置の概略、被分析試料の調製、測定操作およびデータ解析までの流れを理解できる。また習得した機器分析法を専攻科実験あるいは専攻科研究において実践することができる。

ルーブリック			
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安
評価項目1	機器分析法について、測定原理および特徴、装置の概略、測定からデータ解析までの流れを良く理解でき、実践することができる。	機器分析法について、測定原理および特徴、装置の概略、測定からデータ解析までの流れを理解できる。	機器分析法について、測定原理および特徴、装置の概略、測定からデータ解析までの流れを理解できない。
評価項目2			
評価項目3			

学科の到達目標項目との関係
 (E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1

教育方法等	
概要	様々な機器分析法の原理、特徴および装置の概略等について講義を行う。この講義で得た知見をもとに専攻科実験を行い、各分析法の理解を深め、専攻科研究に活かせるようにする。
授業の進め方と授業内容・方法	オムニバス方式でおこない、毎回担当教員が一つの機器分析法について講義をおこなう。
注意点	

事前・事後学習、オフィスアワー

授業計画				
		週	授業内容・方法	週ごとの到達目標
前期	1stQ	1週	原子吸光分析法	原子吸光分析法の原理を理解し、説明できる。
		2週	吸光光度法	吸光光度法の原理を理解し、説明できる。
		3週	比表面積測定法	比表面積測定法の原理を理解し、説明できる。
		4週	X線回析装置	X線回析装置の原理を理解し、説明できる。
		5週	PCR法・アガロースゲル電気泳動	PCR法・アガロースゲル電気泳動の原理を理解し、説明できる。
		6週	走査型電子顕微鏡	走査型電子顕微鏡の原理を理解し、説明できる。
		7週	誘導結合プラズマ発光分析装置	誘導結合プラズマ発光分析装置の原理を理解し、説明できる。
		8週	高速液体クロマトグラフィー	高速液体クロマトグラフィーの原理を理解し、説明できる。
	2ndQ	9週	ポリアクリルアミドゲル電気泳動	ポリアクリルアミドゲル電気泳動の原理を理解し、説明できる。
		10週	フーリエ変換赤外線吸収法	フーリエ変換赤外線吸収法の原理を理解し、説明できる。
		11週	超伝導核磁気共鳴装置	超伝導核磁気共鳴装置の測定原理を理解し、説明できる。
		12週	ゲル浸透クロマトグラフィー	ゲル浸透クロマトグラフィーの原理を理解し、説明できる。
		13週	熱分析	熱分析の原理を理解し、説明できる。
		14週	力学的性質の測定	力学的性質の測定原理を理解し、説明できる。
		15週	まとめ・レポート作成	
		16週	期末試験	

評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	ゲノム工学
科目基礎情報					
科目番号	0042		科目区分	専門 / 選択	
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	1	
開設期	後期		週時間数	2	
教科書/教材	ゲノム第3版 新しい生命情報システムへのアプローチ T.A BROWN著; 村松正實、木南凌 監訳; メディカル・サイエンス・インターナショナル				
担当教員	斎藤 菜摘				
目的・到達目標					
ゲノム分子生物学は21世紀の生物学を担う学問の一つである。生命科学を専攻する学生のみならず、全学生にとって概要を知るべき学問分野である。次を達成目標とする。 1) ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオームの定義、意義、研究方法を理解する 2) 地球上に存在する種々の生物のゲノムの特徴を理解する					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安		
評価項目1	ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオームを定義し、これらの意義の違いを説明し、ゲノム発現過程とどうつながっているかを述べることができる	ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオームを定義し、これらがゲノム発現過程とどうつながっているかを述べることができる	ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオームを説明できない		
評価項目2	DNAクローニング、ゲノム配列解析、ゲノム機能解析について、例をあげて詳細に説明できる	DNAクローニング、ゲノム配列解析、ゲノム機能解析について、概要がわかる	DNAクローニング、ゲノム配列解析、ゲノム機能解析について、何も説明できない		
評価項目3	原核生物、真核生物、ウイルスのゲノムについて、特徴と違いを詳しく説明できる	原核生物、真核生物、ウイルスのゲノムについて、特徴と違いの概要を説明できる	原核生物、真核生物、ウイルスのゲノムについて、特徴と違いを何も説明できない		
学科の到達目標項目との関係					
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1					
教育方法等					
概要	ゲノム分子生物学は21世紀の生物学を担う学問の一つである。生命科学を専攻する学生のみならず、全学生にとって概要を知るべき学問分野である。本授業は、該当分野の基本的な事象から最先端の議論にまで触れることになる。授業は教科書「ゲノム第3版」にそって行われ、講師が分子生物学やゲノム研究に従事してきた経験からより具体的な解説を行う。ゲノム機能を理解するために基本となる事象を学び、原核生物、真核生物、ウイルスなどのゲノムについて理解することを目指す。				
授業の進め方と授業内容・方法	教科書「ゲノム第3版」の図を示したパワーポイントを用いて、教科書の内容を解説する。				
注意点	評価は、期末テスト、授業の最初に毎回行う小テスト、出席で行う。小テストの受講を出席とみなす。				
事前・事後学習、オフィスアワー					
授業計画					
	週	授業内容・方法	週ごとの到達目標		
後期	3rdQ	1週	ガイダンスおよび「ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオーム」について概説。	ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオームの定義を説明できる。	
		2週	ゲノム、トランスクリプトーム、プロテオーム	遺伝子はDNAでできている、DNAの構造、RNAとトランスクリプトーム、タンパク質とプロテオーム、を理解する。	
		3週	DNA研究法	組み換えDNA技術に用いられる酵素類の役割、クローニングベクターの性質と使用法を理解する。	
		4週	DNA研究法	ポリメラーゼ連鎖反応の原理と応用を理解する	
		5週	ゲノム地図の作成	ゲノム解析におけるゲノム地図、遺伝地図の重要性と概要を理解する。	
		6週	ゲノム配列解析	様々な塩基配列決定法の原理を理解する。	
		7週	ゲノム配列解析	ヒトゲノムプロジェクトを中心に、様々なゲノムプロジェクトについて知る。	
		8週	ゲノム配列の理解	遺伝子機能を調べるための、コンピューターによる機能解析、実験的な遺伝子不活性化による機能解析手法の概要を理解する。	
	4thQ	9週	ゲノム機能解析	ゲノム機能解析方法として、トランスクリプトームとプロテオームの研究方法を説明できる。	
		10週	ゲノム機能解析	ゲノム機能解析方法として、トランスクリプトームとプロテオームの研究方法を説明できる。	
		11週	真核生物ゲノム	真核生物ゲノムに見られる、多重遺伝子、偽遺伝子、反復DNA配列などの特徴を理解する。	
		12週	原核生物ゲノムと真核生物の細胞小器官ゲノム	細菌が持つゲノム構造を理解し、細胞小器官の起源となった細胞内共生説を説明できる。	
		13週	ウイルスゲノムと動く遺伝子	バクテリオファージやウイルスゲノム構造を理解する。トランスポゾンなどゲノム上を移動する遺伝子について説明できる。	
		14週	期末テスト	これまでの講義の理解を確認する。	
		15週	講義まとめ	ゲノム工学の講義をまとめる。関連分野の紹介を行う。	
		16週			
評価割合					

	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	60	0	0	10	0	40	110
基礎的能力	60	0	0	10	0	40	110
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	塑性加工学 (1, 2年)		
科目基礎情報							
科目番号	0043		科目区分	専門 / 選択			
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	1			
開設期	後期		週時間数	後期:2			
教科書/教材	基礎塑性加工学 (第2版), 川並ほか, 森北出版						
担当教員	本橋 元						
目的・到達目標							
1. 塑性加工の実例を知り, それがどのような目的で使われているかを理解できる。 2. 板・形鋼などの圧延および製管方法を理解できる。 3. せん断, 曲げ, 深絞り, 張出し, スピニング, 引抜き, 押し出し, 鍛造などの加工方法を理解できる。 4. 塑性ひずみ, 降伏条件, 応力-ひずみ関係式などを説明できる。 5. ブロックの圧縮解析の手法を理解できる。							
ルーブリック							
		理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安			
評価項目1		各種塑性加工方法の特徴を説明できる。	主要な塑性加工方法の概略を説明できる。	左記ができない			
評価項目2		塑性歪, 降伏条件, 応力-歪の関係式を説明できる。	塑性歪, 降伏条件, 応力-歪の関係式を概ね理解できる。	左記ができない			
評価項目3		ブロックの圧縮解析ができる。	ブロックの圧縮解析の手法が理解できる。	左記ができない			
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち, 生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	まず代表的な塑性加工の例として, 曲げ, 絞り, 押し出し, 圧延などについて, 具体的な例を挙げながら解説する。次に, 塑性加工を受ける材料の応力とひずみを力学的に解析するための基礎を講義する。すなわち, 応力に関する基本量, 塑性ひずみ, 降伏条件, 応力-ひずみ関係式などについて述べ, 塑性変形の特徴を理解させる。また, 実際の初等的な解析例にも触れる。						
授業の進め方と授業内容・方法	前半 (塑性加工) については, 実例を挙げながら, 各加工方法の特徴を説明する。 後半 (塑性力学) については, ヒントをもとに, 各自で式を誘導する。						
注意点	1. 中間・期末試験 (80%), レポート・受講態度等 (20%) により評価し, 60点以上を合格とする。 試験問題のレベルは, 教科書中の例題・章末の演習問題と同程度とする。 2. 材料力学の基礎 (応力・歪) を理解しておくこと。						
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
		週	授業内容・方法	週ごとの到達目標			
後期	3rdQ	1週	1. 塑性加工のはたらき	塑性加工の実例と, それが利用されている理由を説明できる。			
		2週	2. 素材のつくり方 1) 板, 型鋼	板, 型鋼の圧延を説明できる。			
		3週	2) 棒, 線, 管	棒・線の加工方法および製管方法を説明できる。			
		4週	3. 加工法のいろいろ 1) せん断, 曲げ, 深絞り	せん断, 曲げ, 深絞りの加工方法を説明できる。			
		5週	2) 張出し, スピニング, 引抜き	張出し, スピニング, 引抜き加工を説明できる。			
		6週	3) 押し出し, 鍛造	引抜き, 押し出し, 鍛造加工を説明できる。			
		7週	中間試験	1週から6週までの講義内容について, 基礎的な事項を系統的に説明できる。			
	8週	4. 塑性力学の基礎 1) 主応力, 偏差応力	主応力, 静水応力, 偏差応力を説明できる。				
	4thQ	9週	2) 降伏条件	トレスカとミーゼスの降伏条件を説明できる。			
		10週	3) 真歪	歪と体積一定則を説明できる。			
		11週	4) 相当応力, 相当歪	相当応力, 相当歪を説明できる。			
		12週	5) 応力-歪の関係式	フックの法則, 全歪理論を説明できる。			
		13週	5. 初等解析-ブロック状材料の圧縮- 1) 加工圧力と応力状態	圧縮解析における応力状態を説明できる			
		14週	2) 歪と変形	単軸圧縮との違いを説明できる。			
		15週	期末試験	主として8週から14週までの講義内容について, 基礎的な事項を系統的に説明できる。			
		16週	答案返却・解説				
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	80	0	0	0	0	20	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	80	0	0	0	0	20	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	反応速度論 (1, 2年)		
科目基礎情報							
科目番号	0044		科目区分	専門 / 選択			
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	1			
開設期	後期		週時間数	後期:2			
教科書/教材	アトキンス 物理化学要論 第5版 (東京化学同人)						
担当教員	飯島 政雄						
目的・到達目標							
反応速度式の定義や速度定数の意味を説明でき、一次および二次反応の微分速度式から積分速度式を誘導し、積分速度式を駆使して様々な速度パラメータを計算できること。さらに、反応機構と速度式との関係を理解し、衝突理論や遷移状態理論から反応速度を熱力学的に説明できること。							
ループリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	反応速度定数の意味を説明でき、一次および二次反応の微分速度式から積分速度式を誘導できる。		反応速度定数の意味を説明でき、一次および二次反応の微分速度式から積分速度式を理解できる。		反応速度定数の意味を説明できず、一次および二次反応の微分速度式や積分速度式を理解できない。		
評価項目2	速度定数を駆使してある時刻や平衡時での濃度計算ができる。		速度データから速度定数や半減期を算出できる。		速度データから速度定数や半減期を算出できない。		
評価項目3	複雑な反応系のいくつかについて、速度式と複雑な反応系の一例について、速度式と反応機構の関係を説明できる。		複雑な反応系の一例について、速度式と反応機構の関係を説明できる。		衝突理論と遷移状態理論を説明できない。		
評価項目4	衝突理論と遷移状態理論における速度定数と熱力学的パラメータの関係を説明できる。		衝突理論と遷移状態理論の概略を説明できる。		衝突理論と遷移状態理論を説明できない。		
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	反応速度の定義とおよびその測定方法を説明し、反応速度が微分方程式で表されることを確認する。その積分によって任意の時間における物質の濃度を計算できるようにする。また、素反応や律速段階という概念から反応機構と速度式との関係を理解し、衝突理論や遷移状態理論から反応速度を熱力学的に説明できるようにする。						
授業の進め方と授業内容・方法	前半は、演習を交えながら微分および積分速度式について反応速度論の基礎的な部分をしっかりと身につける。後半では複雑な反応系について速度式について学び、反応速度定数や各種熱力学的パラメータの値から反応機構が推察できることを理解する。なお、単元毎に与えられた課題をレポートとして提出する。						
注意点	授業中に計算問題を解答する演習も行う。						
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
	週	授業内容・方法		週ごとの到達目標			
後期	3rdQ	1週	反応速度の定義と速度測定法		反応速度の定義を濃度の時間変化から説明できること。		
		2週	同上		反応速度の測定法を例示できること。		
		3週	微分速度式と積分速度式		与えられた反応式から微分速度式を示し、一次反応の積分速度式を誘導できること。		
		4週	同上		二次の積分速度式を誘導できること。		
		5週	いろいろな反応の速度式		平衡反応や逐次反応などの複雑な反応の微分及び積分速度式を理解できることとする。		
		6週	反応速度の温度依存性		アレニウス式を用いて活性化エネルギーを算出できること。		
		7週	中間試験		前半部分の達成度を試験する。		
		8週	速度式の解釈		連鎖反応や光反応などの複雑な反応の速度式を理解できること。		
	4thQ	9週	触媒反応の定義と分類		触媒反応の意味と反応系の違いによる分類を説明できること。		
		10週	不均一系触媒反応		固体表面での吸着作用を理解し、不均一系触媒反応の速度式と反応機構を説明できること。		
		11週	均一系触媒反応		溶液中での均一系の触媒反応の速度式と反応機構を説明できること。		
		12週	酵素反応		ミカエリス-メンテン機構を理解し、酵素反応の速度式を説明できること。		
		13週	衝突理論		衝突理論によって反応速度定数の意味を説明できること。		
		14週	遷移状態理論		アイリングの遷移状態理論を理解し、反応速度定数と熱力学的パラメータの関係を説明できること。		
		15週	期末試験		後半部分の達成度を試験する。		
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	80	0	0	0	20	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	80	0	0	0	20	0	100

分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0
---------	---	---	---	---	---	---	---

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	生物資源利用化学 (1, 2年)
科目基礎情報					
科目番号	0045		科目区分	専門 / 選択	
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2	
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	1	
開設期	前期		週時間数	前期:2	
教科書/教材	参考図書「セルロースの科学」磯貝明著 (松浦 担当)				
担当教員	飯島 政雄, 松浦 由美子				
目的・到達目標					
1. 植物資源からのセルロースの抽出法、セルロースの構造および特性に関する基礎知識を身につける。(松浦 担当) 2. 高機能性セルロース材料の例を挙げ、その特徴を説明できる。(松浦 担当) 3. タンパク質資源からの有用タンパク質の抽出法、その構造および特性に関する基礎知識を身につけ、説明できる。(飯島 担当) 4. 脂質資源からのバイオ燃料への変換法、その構造および特性に関する基礎知識を身につけ、説明できる。(飯島 担当)					
ルーブリック					
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安		
評価項目 1 (松浦 担当)	植物資源に関する概要、セルロースの構造および特性に関する基礎知識を身につけている。	植物資源に関する概要、セルロースの構造および特性に関する基礎知識を概ね身につけている。	植物資源に関する概要、セルロースの構造および特性に関する基礎知識を身につけていない。		
評価項目 2 (松浦 担当)	高機能性セルロース材料の例を挙げ、その特徴を説明できる。	高機能性セルロース材料の例を挙げ、その特徴を概ね説明できる。	高機能性セルロース材料の例を挙げ、その特徴を説明できない。		
評価項目 3 (飯島 担当)	タンパク質資源に関する概要、その構造および特性を説明し、例示できる。	タンパク質資源に関する概要、その構造および特性を説明できる。	タンパク質資源に関する概要、その構造および特性を説明できない。		
評価項目 3 (飯島 担当)	バイオ燃料に関する概要、その構造および特性を説明し、例示できる。	バイオ燃料に関する概要、その構造および特性を説明できる。	バイオ燃料に関する概要、その構造および特性を説明できない。		
学科の到達目標項目との関係					
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1					
教育方法等					
概要	自然界に存在する生物由来の物質を資源 (バイオマス) として利用するための化学プロセスについて学ぶ。動植物やその廃棄物などをエネルギー資源や有用な物質に化学変化させることで資源の循環と地球温暖化の防止につながる事を理解する。 前半では、セルロースの構造および特性に関する基礎知識に加え、高機能性セルロース材料の例を挙げ、その特徴を解説する。セルロースは地球上に大量に存在し、かつ再生産が可能なことから有望な有機資源として期待されており、紙・パルプ、繊維として使用されているほか、電子機器、医療・薬品分野など幅広い分野で応用されている。(松浦 担当) 後半では、タンパク質資源として廃棄されている絹糸を例にその抽出法や利用法について解説する。そして、脂質資源として廃棄食用油からのバイオディーゼル燃料への変換やその課題について主に解説する。(飯島 担当)				
授業の進め方と授業内容・方法	プリントを用いて、セルロース資源に関する概説、セルロースの構造および特性に関する基礎知識を説明し、高機能性セルロース材料の例を挙げ、その特徴を解説する。(松浦 担当) タンパク質資源および脂質資源について教員作成の資料をもとに解説する。(飯島 担当)				
注意点	前半(松浦担当)および後半(飯島担当)それぞれにおいてテスト80%、レポート20%で評価し、これらを平均して総合評価する。				
事前・事後学習、オフィスアワー					
授業計画					
	週	授業内容・方法	週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	1.生物資源 (バイオマス) の定義と分類 2.セルロース系バイオマス資源の現状	バイオマスの概要とセルロース系バイオマスの賦存量、生産量およびその利用状況について説明できる。	
		2週	セルロース資源の構造とセルロース精製法	セルロース資源の構造とセルロース精製法を説明できる。	
		3週	セルロースの構造および特性	セルロースの基本構造およびその特性について理解できる。	
		4週	セルロースの化学反応	セルロースの基本的な誘導体の種類、セルロース誘導体の調製法を説明できる。	
		5週	セルロースの利用 1 分離膜、光学異性体分離剤など	分離膜、光学異性体分離剤などのセルロース材料について説明できる。	
		6週	3. ナノセルロースの構造と特性	ナノセルロースの構造と特性について説明できる。	
		7週	セルロースの利用 2 セルロースナノ材料	セルロースナノ材料の具体例とその特徴を説明できる。	
		8週	中間試験	前半の講義の理解を確認する。	
	2ndQ	9週	4.タンパク質資源 有用タンパク質の抽出法	タンパク質資源からの有用タンパク質の抽出法を説明できる。	
		10週	有用タンパク質の構造とその特性	有用タンパク質の構造とその特性を説明できる。	
		11週	有用タンパク質の利用例	有用タンパク質の利用例を説明できる。	
		12週	5.脂質資源 バイオディーゼル燃料の製造法とその構造	バイオディーゼル燃料の製造法とその構造を説明できる。	
		13週	バイオディーゼル燃料の特性と課題	バイオディーゼル燃料の特性を説明でき、課題を理解できる。	
		14週	6.その他のバイオ燃料	バイオエタノールやメタン発酵などのバイオエネルギーについて説明できる。	
		15週	期末試験	後半の講義の理解を確認する。	
		16週			
評価割合					

	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	80	0	0	0	20	0	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	80	0	0	0	20	0	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	制御工学特論		
科目基礎情報							
科目番号	0062	科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	2				
開設期	前期	週時間数	2				
教科書/教材	適宜プリントを配布する。参考書：デジタル制御工学 兼田雅弘 共立出版						
担当教員	中山 敏男						
目的・到達目標							
1. 微分方程式から状態方程式が求められる。 2. 状態方程式から伝達関数行列, 伝達関数行列から状態方程式が求められる。 3. 状態方程式の解を求めることができる。 4. 可観測, 可制御の意味を理解し判定できる。 5. 簡単なデジタル制御系を設計できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	状態方程式の解とシステムの安定性理論, システムの可制御性と可観測性について説明できる。	状態方程式の解とシステムの安定性理論, システムの可制御性と可観測性について理解できる。	状態方程式の解とシステムの安定性理論, システムの可制御性と可観測性について理解できていない。				
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち, 生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	機械や装置の制御系において, コンピュータを組み込みデジタル制御が広く利用されるようになってきている。そこで本講義は, 多入力多出力システムの解析手法を習得し, 制御技術者に必要な制御システムの解析・設計法について学習する。						
授業の進め方と授業内容・方法	学年末試験 (80%), 受講態度 (20%) を総合的に評価する。						
注意点	参考書: 線形システム制御理論 大住晃 森北出版株式会社						
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
	週	授業内容・方法	週ごとの到達目標				
前期	1stQ	1週	デジタル制御の基礎概念				
		2週	離散時間系の動的システムと数式表現 - Z変換 -	デジタル信号の数学的取り扱いを理解でき, Z変換について理解できる。			
		3週	離散時間系の動的システムと数式表現 - パルス伝達関数 -	デジタル信号の数学的取り扱いを理解でき, パルス伝達関数について理解できる。			
		4週	状態方程式の解とシステムの安定性理論 - 状態方程式の解 (1) -	システムの状態方程式を導出できる。			
		5週	状態方程式の解とシステムの安定性理論 - 状態方程式の解 (2) -	システムの状態方程式の解を求めることができる。			
		6週	状態方程式の解とシステムの安定性理論 - システムの漸近安定性 (1) -	システムの安定性について理解できる。			
		7週	状態方程式の解とシステムの安定性理論 - システムの漸近安定性 (2) -	システムの安定性について安定判別ができる。			
		8週	システムの可制御性と可観測性 - 可制御性 (1) -	システムの可制御性について理解できる。			
	2ndQ	9週	システムの可制御性と可観測性 - 可制御性 (2) -	システムの可制御性について判断ができる。			
		10週	システムの可制御性と可観測性 - 可観測性 (1) -	システムの可観測性について理解できる。			
		11週	システムの可制御性と可観測性 - 可観測性 (2) -	システムの可観測性について判断ができる。			
		12週	倒立振子の安定化問題 (1)	現代制御理論を用いた設計法のなかで, 極配置法, 最適レギュレータ, 評価関数について倒立振子を例に理解できる。			
		13週	倒立振子の安定化問題 (2)	現代制御理論を用いた設計法のなかで, 極配置法, 最適レギュレータ, 評価関数について倒立振子を例に理解できる。			
		14週	倒立振子の安定化問題 (3)	現代制御理論を用いた設計法のなかで, 極配置法, 最適レギュレータ, 評価関数について倒立振子を例に理解できる。			
		15週	まとめ				
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	90	0	0	10	0	0	100
基礎的能力	45	0	0	0	0	0	45
専門的能力	45	0	0	10	0	0	55
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	電磁気応用工学			
科目基礎情報								
科目番号	0063		科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単: 2				
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	2				
開設期	前期		週時間数	前期:2				
教科書/教材	教科書: 講義中の配布資料等、参考書: 「情報伝送入門」、内藤喜之、昭晃堂							
担当教員	保科 紳一郎							
目的・到達目標								
アンテナや高周波回路のような波長に対して回路長が無視できない回路を取り扱う「分布定数回路」の基本的な考え方について学習する。本講義では座学のみならず、座学で学ぶ「分布定数回路」理論をもとに簡単な回路を作製し、その回路の回路パラメータの測定を行う。実習を通して高周波回路理論の応用と基礎的な計測手法について学習する。								
ルーブリック								
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安			
評価項目1	分布定数乗数回路理論を理解して、特性インピーダンス、負荷から入力インピーダンス、反射係数を算出できる。		分布定数乗数回路理論を理解して、特性インピーダンスを説明できる。		分布定数乗数回路理論を理解して、特性インピーダンスを説明できない。			
評価項目2	スミスチャートを使って位置と入力インピーダンス/反射係数の関係を読み取ることができる。		スミスチャートから反射係数、インピーダンスを読み取ることができる。		スミスチャートから反射係数、インピーダンスを読み取ることができない。			
評価項目3								
学科の到達目標項目との関係								
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1								
教育方法等								
概要	アンテナや高周波回路のように波長に対して回路長が無視できない回路を取り扱う分布定数回路の基本的な考え方について学習する。本講義は理論だけでなく、簡単な分布定数回路の設計、製作、測定を通じて、実際の高周波(数GHz帯)回路の取扱いについても習熟する。高周波特性の測定に広く用いられているネットワークアナライザを測定に使用することにより、本装置の基本的な使い方も習得する。							
授業の進め方と授業内容・方法	授業形態は講義が主体である。講義内容に関するレポートを課す。筆記試験(50%)、実習課題に対するレポート(40%)、出席状況(10%)を総合的に評価する。期末試験は行わない。総合評価60点以上を合格とする。筆記試験の内容は講義中に示した例題に沿ったものとする。							
注意点								
事前・事後学習、オフィスアワー								
授業計画								
前期	1stQ	週	授業内容・方法			週ごとの到達目標		
		1週	分布定数回路理論(1)			分布定数回路と集中定数回路の違いが理解できる。分布定数回路上を伝達する電圧波を式で表わすことができる。		
		2週	分布定数回路理論(2)			分布定数回路上の電圧波・電流波の関係からインピーダンスを導出できる。		
		3週	分布定数回路理論(3)			インピーダンスと反射係数の関係を理解できる。		
		4週	分布定数回路理論(4)			線路長がインピーダンス、反射係数に与える影響を理解できる。		
		5週	スミスチャート(1)			スミスチャートの基本的な概念を理解できる。インピーダンス、反射係数をスミスチャート上から読み取ることができる。		
		6週	スミスチャート(2)			経路長とスミスチャートの関係を読み取ることができる。スミスチャートとアドミタンスチャートの関係を理解できる。		
		7週	スミスチャート(3)			イミタンスチャートを使ってLCR素子を接続した場合のチャート上の変化を理解できる。		
	8週	高周波回路の設計(1)			整合回路の理論的説明説明ができる。スミスチャートを使ってL, Cを使った整合回路の設計法をりかいはできる。			
	2ndQ	9週	高周波回路の設計(2)			スタブを使った整合回路の理論を理解できる。スミスチャートを使ったスタブの設計法を理解できる。		
		10週	講義内容について試験					
		11週	テストの返却					
		12週	実習内容・測定機器の説明			実習内容の説明を行う。同時にSパラメータを測定するネットワークアナライザについてその概念を理解できる。次週の実験に使う伝送回路の設計を行う。		
		13週	伝送回路の作製と性能評価			伝送回路の組み立てを行う。ネットワークアナライザを用いてS11の測地を行う。		
		14週	整合回路の作製と性能評価			整合回路の組み立てを行う。ネットワークアナライザを用いてS11の測地を行う。		
		15週	レポート整理と提出			実験内容についてレポートををまとめる。		
16週								
評価割合								
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計	
総合評価割合	50	0	0	10	0	40	100	
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0	

專門的能力	50	0	0	10	0	40	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	信号処理特論		
科目基礎情報							
科目番号	0064	科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	2				
開設期	前期	週時間数	2				
教科書/教材	ブライント等化と同定(和訳)						
担当教員	武市 義弘						
目的・到達目標							
ディジタル信号処理技術の1つであるブライント信号処理を通して、基礎、技術、アルゴリズムなどの基本的な考え方について学習する。また、輪講発表とすることでプレゼン発表能力の向上、信号処理の基礎と諸分野での応用を理解することができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	信号処理技術の応用を通してにアルゴリズムを導出できる。	信号処理技術の応用に関して理解・説明できる。	信号処理技術の基礎に関して理解できる。				
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	ディジタル信号処理技術の1つであるブライント信号処理を通して、基礎、技術、アルゴリズムなどの基本的な考え方について学習する。また、輪講発表とすることでプレゼン発表能力の向上を行う。この考え方を習得することで、信号処理の基礎と諸分野での応用を理解することができる。						
授業の進め方と授業内容・方法	輪講発表40%、プレゼン資料30%、配布資料30%で評価し、総合評価60点以上を合格とする。輪講発表は、図表の説明、発表態度、質問に対する受答え等について評価する。プレゼン資料と配布資料は、基本構成、図表の記述、まとめの内容等について評価する。						
注意点							
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
	週	授業内容・方法	週ごとの到達目標				
前期	1stQ	1週	導入1	信号処理技術についての概要が理解できる。			
		2週	導入2	信号処理技術についての概要が理解できる。			
		3週	基本概念とアプローチ1	ブライント信号処理技術の基本概念を学習することで、同定・等化について理解できる。			
		4週	基本概念とアプローチ2	ブライント信号処理技術の基本概念を学習することで、同定・等化について理解できる。			
		5週	SISO ブライント等化アルゴリズム1	SISO ブライント等化アルゴリズムについて理解できる。			
		6週	SISO ブライント等化アルゴリズム2	SISO ブライント等化アルゴリズムについて理解できる。			
		7週	SISO ブライント等化アルゴリズム3	SISO ブライント等化アルゴリズムについて理解できる。			
		8週	SISO ブライント等化による収束分析1	SISO ブライント等化アルゴリズムのシミュレーション例を通して、係数修正の収束分析について理解できる。			
	2ndQ	9週	SISO ブライント等化による収束分析2	SISO ブライント等化アルゴリズムのシミュレーション例を通して、係数修正の収束分析について理解できる。			
		10週	SISO ブライント等化による収束分析3	SISO ブライント等化アルゴリズムのシミュレーション例を通して、係数修正の収束分析について理解できる。			
		11週	2次統計量による線形マルチ回路識別法	統計量の概念、2次統計量を通して線形マルチ回路識別法について理解できる。			
		12週	シングルユーザ回路識別による周波数領域法1	周波数領域法による回路係数修正について理解できる。			
		13週	シングルユーザ回路識別による周波数領域法2	周波数領域法による回路係数修正について理解できる。			
		14週	適応マルチ回路等化1	マルチ回路の係数修正を等化について理解できる。			
		15週	適応マルチ回路等化2	マルチ回路の係数修正を等化について理解できる。			
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	0	100	0	0	0	0	100
基礎的能力	0	30	0	0	0	0	30
専門的能力	0	50	0	0	0	0	50
分野横断的能力	0	20	0	0	0	0	20

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	音響工学		
科目基礎情報							
科目番号	0065	科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	2				
開設期	前期	週時間数	2				
教科書/教材	書名: 機械系の音響工学、著者: 一宮亮一、発行所: コロナ社						
担当教員	柳本 憲作						
目的・到達目標							
音響管内を伝播する音について速度ポテンシャルによる平面波の波動方程式を導出し、これにより共鳴周波数を計算できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	平面波の波動方程式を導出できる	平面波、球面波、線音源、点音源がわかる。	音の物理的性質を理解していない。				
評価項目2	速度ポテンシャルにより波動方程式を表せる。	音圧レベルを計算できる。	音響管内の定在波が理解できない。				
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	騒音問題や車室をはじめ居住空間内の音場を解析するために必要な音響工学を学ぶために、音波の持つ物理的な側面から講義をおこなう。						
授業の進め方と授業内容・方法	概ね教科書の単元に基づいて行っていく。講義では、pptを用いたスライドでおこなう。						
注意点							
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
		週	授業内容・方法	週ごとの到達目標			
前期	1stQ	1週	音響信号について	音の信号としての扱いを理解できる。			
		2週	信号の統計的処理	自己相関関数、相互相関関数を理解する。			
		3週	音波の基礎	音のフーリエスペクトルを理解できる。			
		4週	平面波の波動方程式	平面波の波動方程式を理解する。			
		5週	速度ポテンシャル	速度ポテンシャルによる波動方程式を理解する。			
		6週	球面波	球面波が理解できる。			
		7週	点音源	体積速度を用いた点音源が理解できる。			
		8週	音響管の波動方程式	音響管の境界条件と平面波の波動方程式が理解できる。			
	2ndQ	9週	音圧分布と粒子速度分布	音響管内の定在波が理解できる。			
		10週	音の単位とレベル	音圧レベル、音響パワーレベルなど、単位系が理解できる。			
		11週	音の速度	音の速度が理解できる。			
		12週	音の伝搬	音波の反射、屈折、透過などの物理的性質を理解できる。			
		13週	室内の音響	透過損失、室定数、吸音率など、理解できる。			
		14週	音響の測定方法	音の測定法や測定機器を理解できる。			
		15週	音響の利用について	音響を用いた計測技術について理解できる。			
		16週	学年末試験				
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100
基礎的能力	30	0	0	0	0	30	60
専門的能力	40	0	0	0	0	0	40
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)		授業科目	計算機システム		
科目基礎情報								
科目番号	0066		科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	2				
開設期	後期		週時間数	2				
教科書/教材	PDFテキスト							
担当教員	佐藤 淳							
目的・到達目標								
組み込みシステムの開発からシステムLSIの上流設計に至る領域について網羅し、組み込みシステムとシステムLSIの関係、システムLSI設計の特徴と課題、組み込みシステムの要求仕様定義、システムアーキテクチャ設計技術、機能検証技術、システムLSIの設計事例について講義する。 本講義は、株式会社半導体理工学研究センター寄付講座の支援を受け、同講座の講義資料を使用する。								
ルーブリック								
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安			
評価項目1								
評価項目2								
評価項目3								
学科の到達目標項目との関係								
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1								
教育方法等								
概要	ICTを駆使した組み込みシステムを対象に、ユーザーニーズに基づいた要求仕様を分析してシステム仕様にまとめ、制約条件の中で実現方法が最適になるように、具体的なハードウェアとソフトウェアの仕様に落とし込むシステム設計について解説する。							
授業の進め方と授業内容・方法	テキストはBlackBoardで提供し、あらかじめ予習して講義にのぞみ、講義毎に小テストを実施する。							
注意点								
事前・事後学習、オフィスアワー								
授業計画								
後期	3rdQ	週	授業内容・方法			週ごとの到達目標		
		1週	組み込みシステムとは何か			組み込みシステム、組み込みシステムとシステムLSIの関係を説明できる。		
		2週	要求仕様定義			要求仕様定義プロセスの概要を説明できる。		
		3週						
		4週	要求仕様書の作成			仕様記述言語の必要性、ML言語の概要を説明できる。		
		5週						
		6週	システムアーキテクチャ設計技術			システムアーキテクチャの設計方法論、計算モデルの概要を説明できる。		
		7週						
	8週	全体像と計算モデル			システム仕様記述言語の役割と特徴を説明できる。			
	4thQ	9週						
		10週	構造化モデリングと設計フロー			仕様のモデリング手法を理解し、構造化モデリングにしたがった設計フローを説明できる。		
		11週						
		12週	コデザイン			コデザインの概念、見積もりの重要性について説明できる。		
		13週						
		14週	機能検証技術			検証の重要性、形式的検証技術、アサーションベース検証の概要を説明できる。		
		15週						
16週								
評価割合								
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計	
総合評価割合	140	0	0	0	0	60	200	
基礎的能力	70	0	0	0	0	30	100	
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0	

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	センサ工学		
科目基礎情報							
科目番号	0067		科目区分	専門 / 選択			
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	2			
開設期	後期		週時間数	2			
教科書/教材	適宜プリント配布						
担当教員	神田 和也						
目的・到達目標							
1. センサ工学の基礎について、理解できる。 2. 代表的なセンサについて、原理と特性を理解し、応用方法を理解できる。 3. 光応用センシングについて、理解し、代表的な事例について応用方法を理解できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	センサ工学の基礎について、深く理解できる。	センサ工学の基礎について、理解できる。	センサ工学の基礎について、理解できない。				
評価項目2	代表的なセンサについて、原理と特性を理解し、応用方法を理解できる。	代表的なセンサについて、原理と特性を理解できる。	代表的なセンサについて、原理と特性を理解できない。				
評価項目3	光応用センシングについて、理解し、代表的な事例について応用方法を理解できる。	光応用センシングについて、理解できる。	光応用センシングについて、理解できない。				
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	すぐれたセンサの開発がシステムの優劣の鍵を握る時代になっている。センサ技術は、あらゆる分野の技術を応用して達成される総合技術である。主としてセンサを利用する立場から、必要とされる最小限の基本技術について学ぶ。						
授業の進め方と授業内容・方法	プリントを配布しながら講義を進め、さらに、いくつかの課題について、学生が調べ、まとめ、発表する。						
注意点							
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
後期	3rdQ	週	授業内容・方法	週ごとの到達目標			
		1週	センシング工学の基礎 センシング方式	基本的なセンシング方式の概念を説明できる。			
		2週	単位系	単位系の概念、誤差評価、最小二乗法の手法を理解し応用できる。			
		3週	誤差解析, データ処理	単位系の概念、誤差評価、最小二乗法の手法を理解し応用できる。			
		4週	2. センシングデバイス	代表的なセンサの原理を理解し利用できる。			
		5週	1) 代表的センサの分類と原理 (光センサ, 磁気センサ)	代表的なセンサの原理を理解し利用できる。			
		6週	温度センサ, 歪みセンサ, 流速センサなど)	代表的なセンサの特性や感度を理解し応用できる。			
		7週	2) センサ周辺回路	基本的なセンサの周辺回路を理解しセンサに対応して使い分けができる。			
	8週	3) 特性と利用法	基本的なセンサの周辺回路を理解しセンサに対応して使い分けができる。				
	4thQ	9週	3. 光応用センシング 1) レーザ光の特徴	レーザ光の特徴 (可干渉, 点光源など) を説明できる。			
		10週	3. 光応用センシング 2) 干渉計の原理と応用	代表的な干渉計の原理を理解し応用できる。			
		11週	3. 光応用センシング 3) 光ファイバの原理と応用	光応用センシングとして、光ファイバの原理と応用を理解できる。			
		12週	4. オペアンプを応用した信号処理回路	オペアンプを応用した各種増幅回路, 基本的なLPF, HPFやA/D, D/A変換回路の原理を理解できる。			
		13週	4. オペアンプを応用した信号処理回路	オペアンプを応用した各種増幅回路, 基本的なLPF, HPFやA/D, D/A変換回路の原理を理解できる。			
		14週	・増幅回路, フィルタ回路, A/D, D/A変換回路	オペアンプを応用した各種増幅回路, 基本的なLPF, HPFやA/D, D/A変換回路の原理を理解できる。			
		15週	5. センシングデバイス補足 (MEMSなど)	センシングデバイスの周辺技術について理解できる。			
16週							
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	40	40	0	20	0	0	100
基礎的能力	20	20	0	0	0	0	40
専門的能力	20	20	0	20	0	0	60
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	材料科学		
科目基礎情報							
科目番号	0068	科目区分	専門 / 必修				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	2				
開設期	前期	週時間数	2				
教科書/教材	「基礎固体化学」 村石治人著 (三共出版)						
担当教員	粟野 幸雄						
目的・到達目標							
セラミックスなど生活および産業を支えるいくつかの重要な無機材料の用途・製法・構造について理解できる。現代を支える代表的な新素材を例に、その機能と合成方法、材料開発による環境など、現代社会への波及効果について説明できる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	セラミックスなど生活および産業を支えるいくつかの重要な無機材料の用途・製法・構造について完全に理解でき、現代社会への波及効果についても説明できる。	セラミックスなど生活および産業を支えるいくつかの重要な無機材料の用途・製法・構造についてほぼ理解でき、現代社会への波及効果についても概ね説明できる。	セラミックスなど生活および産業を支えるいくつかの重要な無機材料の用途・製法・構造について理解できず、現代社会への波及効果についても説明できない。				
評価項目2							
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-2							
教育方法等							
概要	材料物性の基礎となる固体中の電子のふるまい及び種々の電気伝導現象の間の差異について学び、導体、半導体、絶縁体の区別について理解する。 材料の電気的、磁気的性質と電子構造との関係について学ぶ。 固体分析の基本であるX線回折分析の原理について学ぶ。 主たる固体材料のセラミックスについて、その製造法について学ぶ。						
授業の進め方と授業内容・方法	授業への取り組み (レポート提出状況・内容) 10%、小テスト40%、期末試験50%によって総合的に評価する。各試験においては達成目標に則した内容を出題する。試験問題のレベルは、教科書および板書、授業ノートと同程度とする。						
注意点	参考書： 「キッテル固体物理学入門」宇野良清ほか訳 (丸善) 「材料科学3」(倍風館) オフィスアワー： 授業日の16:00~17:00						
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
	週	授業内容・方法		週ごとの到達目標			
前期	1stQ	1週	I 構造編(1)電子構造①		電子殻と電子配置を説明出来る。		
		2週	I 構造編(1)電子構造②		量子数と原子軌道の形を説明出来る。		
		3週	I 構造編(1)電子構造③		共有結合性物質、イオン結合性物質と金属結合性物質について、電子配置から説明出来る。		
		4週	II 物性編(1)電気的性質①導電性1		金属と半導体、超伝導体の電気伝導の機構が説明出来る。		
		5週	II 物性編(1)電気的性質①導電性2		イオン伝導体の電気伝導の機構が説明出来る。		
		6週	II 物性編(1)電気的性質②誘電性1		分極と電気双極子モーメントを理解し、誘電体の種類を説明出来る。		
		7週	II 物性編(1)電気的性質②誘電性2		誘電率とコンデンサー容量を理解し、強誘電体の用途を説明出来る。		
		8週	II 物性編(2)磁気的性質①		電気量と磁気量の比較、軌道・スピンによる磁気モーメントを説明出来る。		
	2ndQ	9週	II 物性編(2)磁気的性質②		磁性体を分類し、各磁性体の磁化について説明出来る。		
		10週	II 物性編(2)磁気的性質③		強磁性体の用途について説明出来る。		
		11週	III 基礎固体 (1) X線回折分析①		X線の発生機構を理解し、X線回折(XRD)分析の原理を説明出来る。		
		12週	III 基礎固体 (1) X線回折分析②		XRD分析の利用法について説明出来る。		
		13週	III 基礎固体(2)セラミックス①		セラミックス粉体の各種合成法を説明出来る。		
		14週	III 基礎固体(2)セラミックス②		セラミックス粉体の成形法について、説明出来る。		
		15週	III 基礎固体(2)セラミックス③		各種セラミックス粉体の特徴を説明出来る。		
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	90	0	0	0	0	10	100
基礎的能力	40	0	0	0	0	10	50
専門的能力	40	0	0	0	0	0	40
分野横断的能力	10	0	0	0	0	0	10

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	実践電気電子工学		
科目基礎情報							
科目番号	0069		科目区分	専門 / 必修			
授業形態	授業		単位の種別と単位数	学修単位: 2			
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	2			
開設期	前期		週時間数	2			
教科書/教材	樋渡涓二, エレクトロニクス入門, コロナ社						
担当教員	渡部 誠二						
目的・到達目標							
エレクトロニクスは、コンピュータ、材料、通信システムなど様々な分野で多岐にわたって応用されている。各自の専門分野にかかわるエレクトロニクスについて理解が深まるように幅広く概要を理解する。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安		
評価項目1	電気磁気学や回路工学の概要や基礎が理解できる。		電気磁気学や回路工学の概要や基礎がだいたい理解できる。		電気磁気学や回路工学の概要や基礎が理解できない。		
評価項目2	半導体工学の概要や基礎が理解できる。		半導体工学の概要や基礎がだいたい理解できる。		半導体工学の概要や基礎が理解できない。		
評価項目3	各自の専門に関するエレクトロニクスの応用についてわかりやすく説明できる。		各自の専門に関するエレクトロニクスの応用についてだいたい説明できる。		各自の専門に関するエレクトロニクスの応用について説明できない。		
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-2							
教育方法等							
概要	エレクトロニクスの知識は、電気電子系以外の学生にとっても非常に重要である。ここでは、電気磁気学から情報にわたって幅広くエレクトロニクスの基礎を学んでゆく。						
授業の進め方と授業内容・方法	期末試験30%、レポート30%、プレゼンテーション40%として総合的に評価する。各試験においては、達成目標に則した内容を選定して出題する。試験問題のレベルは、教科書および板書、授業ノートと同程度とする。総合評価で60点以上を合格とする。						
注意点							
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
		週	授業内容・方法		週ごとの到達目標		
前期	1stQ	1週	電気磁気学の基礎		静電気と青磁気において、クーロンの法則が説明できる。		
		2週	電気磁気学の基礎		キルヒホッフの法則を説明できる。抵抗の直並列接続の合成抵抗が計算できる。重ね合わせの理、テブナンの定理を使った回路の計算ができる。		
		3週	電気磁気学の基礎		アンペアの法則を説明できる。フレミングの法則ならびにファラデーの法則が説明できる。自己インダクタンス、相互インダクタンスによる変圧器の解析ができる。		
		4週	過渡現象		RL, RC直列回路の過渡現象について解析できる。		
		5週	交流回路の基礎		交流回路の基本的な解析ができる。		
		6週	交流回路の基礎		交流回路の基本的な解析ができる。		
		7週	交流回路の基礎		交流回路の基本的な解析ができる。		
		8週	電子デバイス		ダイオード、トランジスタの動作原理がわかる。		
	2ndQ	9週	電子デバイス		ダイオード、トランジスタの動作原理がわかる。		
		10週	期末試験				
		11週	最近のエレクトロニクス技術		各自の専門分野で、電気・電子系分野と関連のある最新技術について調査する。		
		12週	最近のエレクトロニクス技術		各自の専門分野で、電気・電子系分野と関連のある最新技術について調査する。		
		13週	最近のエレクトロニクス技術		各自の専門分野で、電気・電子系分野と関連のある最新技術について発表をする。発表をとおして、さらに調査内容について理解が深められる。		
		14週	最近のエレクトロニクス技術		各自の専門分野で、電気・電子系分野と関連のある最新技術について発表をする。発表をとおして、さらに調査内容について理解が深められる。		
		15週	最近のエレクトロニクス技術		各自の専門分野で、電気・電子系分野と関連のある最新技術について発表をする。発表をとおして、さらに調査内容について理解が深められる。		
		16週					
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	40	30	0	0	0	30	100
基礎的能力	40	30	0	0	0	30	100
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	基礎工業力学		
科目基礎情報							
科目番号	0070	科目区分	専門 / 必修				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	2				
開設期	前期	週時間数	2				
教科書/教材	堀野正俊著, 「機械工学入門シリーズ 機械力学入門 (第2版)」 (オーム社)						
担当教員	本橋 元						
目的・到達目標							
1. 物体に作用する力と力のモーメントを見極め, 物体のつり合いを理解できる. 2. 質点および剛体の運動方程式を求めることができる. 3. 仕事・動力・エネルギー・効率を理解できる.							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	応用的な力と力のモーメントのつり合いを説明できる.	基礎的な力と力のモーメント, つり合いが理解できる.	左記ができない				
評価項目2	剛体の運動方程式を求めることができる.	質点の運動方程式を求めることができる.	左記ができない				
評価項目3	仕事・動力・エネルギーの関係を説明できる.	仕事・動力・エネルギーの定義を理解できる.	左記ができない				
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち, 生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-2							
教育方法等							
概要	本講義では工学の基礎となる科目として, ものづくりに必要な力学的な問題を扱う。静力学と動力学における基礎的事項を習得した後, エネルギー・動力の概念を学ぶ。						
授業の進め方と授業内容・方法	講義した内容について課題を与えるので, 各自解いてきて次の授業で自主的に解説してもらう。中間試験40%, 期末試験40%, 課題への取組20%で総合評価し, 60点以上で合格とする。試験問題のレベルは教科書の例題, 演習問題と同程度とする。						
注意点	与えられた課題を解いてくること。						
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
		週	授業内容・方法	週ごとの到達目標			
前期	1stQ	1週	0. 準備	力の表し方, および物理量と次元・単位を理解できる。			
		2週	1. 物体の 1) 速度と加速度	速さと速度, 加速度を理解できる。			
		3週	1. 物体の動き 2) 円運動と相対速度	円運動と相対速度を理解できる。			
		4週	2. 力 (I) 1) ニュートンの運動法則と力の合成・分解	ニュートンの運動法則と力の合成・分解を理解できる。			
		5週	2. 力 (I) 2) 力のモーメント・偶力・重心	力のモーメント・偶力・重心を理解できる。			
		6週	2. 力 (I) 3) 摩擦力	摩擦力を理解できる。			
		7週	3. 力の釣合い	力の釣合い・支点反力を理解できる。			
		8週	中間試験				
	2ndQ	9週	4. 仕事・動力とエネルギー 1) 仕事・動力とエネルギー	仕事・動力とエネルギーの概念を理解できる。			
		10週	4. 仕事・動力とエネルギー 2) 力学的エネルギー保存則と機械の効率	力学的エネルギー保存則と機械の効率を理解できる。			
		11週	5. 力 (II)	向心力と遠心力・慣性力を理解できる。			
		12週	6. 剛体の運動 1) 剛体の運動方程式	剛体の運動方程式を理解できる。			
		13週	6. 剛体の運動 2) 慣性モーメント	慣性モーメントを理解できる。			
		14週	7. 振動	単振動を理解できる。			
		15週	期末試験				
		16週	答案返却・解説				
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	80	0	0	0	0	20	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	0	0	0	0	0	0	0
分野横断的能力	80	0	0	0	0	20	100

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	材料設計学		
科目基礎情報							
科目番号	0071	科目区分	専門 / 選択				
授業形態	授業	単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻	対象学年	2				
開設期	前期	週時間数	2				
教科書/教材	材料工学入門 堀内・金子・大塚 訳 内田老鶴園						
担当教員	五十嵐 幸徳						
目的・到達目標							
授業を受けて学んだことを説明することができる。 説明する際は、単なる用語の羅列ではなく、内容をよく理解し、与えられた制約下でまとめることができる。							
ルーブリック							
	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベルの目安	未到達レベルの目安				
評価項目1	レポートと答案記入が十分	レポートと答案記入がほぼ十分	レポートと答案記入が不十分				
評価項目2	非常にわかりやすい説明である	ほぼ要領を得た説明である	要領を得ない説明である 明らかに意味を取り違えている				
評価項目3							
学科の到達目標項目との関係							
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1							
教育方法等							
概要	これまで経験則に基づく試行錯誤的な手法がとられてきた材料の開発は、現在では要求される性能を満たす材料を設計することが重要となってきている。本講義ではこれまでに学んだ材料に関する知識をベースに、材料が本来持っている性質をいかに有効に引き出して利用するかを目的として、材料の設計・力学・構造を包括的に学習し、合金設計およびセラミックス設計についての考え方を教授する。						
授業の進め方と授業内容・方法	板書をし、適宜、理解しているかあるいはどう考えるかを質問する。 また、課題を与え、それについてレポートを提出する。						
注意点	少人数での講義となるため、欠席しないようにする。						
事前・事後学習、オフィスアワー							
授業計画							
	週	授業内容・方法		週ごとの到達目標			
前期	1stQ	1週	1. 工業材料とその性質, 材料の価格と入手しやすさ		身近な道具や構造物の材料選択, 工業材料の価格, 供給の安定性, 資源の有効利用について理解し説明できる。		
		2週	2. 弾性率		弾性率は結合の強さや原子の充填によってどのように決まるか理解し説明できる。		
		3週	2. 弾性率		弾性率は結合の強さや原子の充填によってどのように決まるか理解し説明できる。		
		4週	2. 弾性率		弾性率は結合の強さや原子の充填によってどのように決まるか理解し説明できる。		
		5週	3. 降伏強さ, 引張強さ, 硬さおよび延性		応力ひずみ曲線, 理想強度, 転位, 強化法, 塑性変形を理解し説明できる。		
		6週	3. 降伏強さ, 引張強さ, 硬さおよび延性		応力ひずみ曲線, 理想強度, 転位, 強化法, 塑性変形を理解し説明できる。		
		7週	3. 降伏強さ, 引張強さ, 硬さおよび延性		応力ひずみ曲線, 理想強度, 転位, 強化法, 塑性変形を理解し説明できる。		
		8週	4. 急速破壊, 靱性および疲労		急速なき裂成長, 破壊靱性, 靱性を高める方法, 疲労の機構を理解し説明できる。		
	2ndQ	9週	4. 急速破壊, 靱性および疲労		急速なき裂成長, 破壊靱性, 靱性を高める方法, 疲労の機構を理解し説明できる。		
		10週	4. 急速破壊, 靱性および疲労		急速なき裂成長, 破壊靱性, 靱性を高める方法, 疲労の機構を理解し説明できる。		
		11週	5. クリープ変形と破壊		材料の高温挙動, クリープ, アレニウスの法則, フィックの第1法則を理解し説明できる。		
		12週	5. クリープ変形と破壊		材料の高温挙動, クリープ, アレニウスの法則, フィックの第1法則を理解し説明できる。		
		13週	6. 合金設計およびセラミックス設計		金属の特徴, 構造材料用セラミックス, 状態図, 設計のための基礎科学, 合金設計, 材料設計について理解し説明できる。		
		14週	6. 合金設計およびセラミックス設計		金属の特徴, 構造材料用セラミックス, 状態図, 設計のための基礎科学, 合金設計, 材料設計について理解し説明できる。		
		15週	6. 合金設計およびセラミックス設計		金属の特徴, 構造材料用セラミックス, 状態図, 設計のための基礎科学, 合金設計, 材料設計について理解し説明できる。		
		16週	試験				
評価割合							
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計
総合評価割合	50	0	0	0	0	50	100
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0
専門的能力	50	0	0	0	0	50	100
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0

鶴岡工業高等専門学校		開講年度	平成29年度 (2017年度)	授業科目	高分子材料化学 (1, 2年)			
科目基礎情報								
科目番号	0261		科目区分	専門 / 選択				
授業形態	講義		単位の種別と単位数	学修単位: 2				
開設学科	生産システム工学専攻		対象学年	2				
開設期	前期		週時間数	前期:2				
教科書/教材	エキスパート応用化学テキストシリーズ 高分子科学-合成から物性まで							
担当教員	佐藤 司							
目的・到達目標								
高分子の1次構造、2次構造、高次構造が発現するための科学的な要因を学び、身の回りの高分子材料の機能性に関連していることを理解する。高分子合成の分類と特徴を学び材料の高性能化に関わっていることを理解する。								
ルーブリック								
	理想的な到達レベルの目安		標準的な到達レベルの目安		未到達レベルの目安			
高分子の構造	1次構造、2次構造、高次構造の発現と特徴を正しく説明できる。		高分子の様々な構造を理解できる。		高分子の構造と分類を説明できない。			
高分子物質の性質	高分子物質の熱的、力学的性質の原因と特徴を正しく説明できる。		高分子物質の性質を理解できる。		高分子物質の性質を説明できない。			
高分子合成	各合成反応の特徴を正しく説明できる。		高分子合成の特徴を説明できる。		高分子合成の特徴を説明できない。			
学科の到達目標項目との関係								
(E) 一つの得意専門分野をもち、生産技術に関する幅広い対応能力を身につける。 E-1								
教育方法等								
概要	身の回りにある高分子材料が適切に利用されている背景には、高分子の1次構造、2次構造、高次構造の発現と深い関わりがある。授業では様々な構造の説明と測定方法について物理化学的な視点から教授する。また、高分子合成の発展によって多様な材料が提供されるようになっており、反応機構と高分子構造の特徴を学ぶ。							
授業の進め方と授業内容・方法	教科書やスライドなどを適宜使用する。板書よりも資料やスライドを用いて様々な構造や実験データを説明し高分子の本質を理解してもらう。適宜演習問題を取り上げ理解度の確認を行う。							
注意点	資料説明やスライド投影による授業が主となる。補足的に板書をするが黒板に書いたことだけを暗記するのでは理解したことになる。高分子がなぜそのような形や性質を示すのか考えながら学ぶこと。本科で学んだ有機化学(3, 4年)、材料化学(4年)の高分子分野をしっかりと理解しておく。							
事前・事後学習、オフィスアワー								
授業計画								
前期	1stQ	週	授業内容・方法			週ごとの到達目標		
		1週	高分子とは 高分子と低分子の違い			高分子と低分子の違いと特徴、高分子説の確立を理解する		
		2週	高分子の一次構造			結合様式、立体規則性、共重合体の構造について分類し説明できる		
		3週	高分子の二次構造			多様なコンフォメーションの生じる要因を説明できる		
		4週	分子量と分子量分布			平均分子量や分子量分布の計算、分子量測定法を理解する		
		5週	高次構造1 (理想鎖、実在鎖、溶液、ブレンド、ゲル)			鎖の広がりを予測できる。溶液やブレンドにした場合の性質を説明できる		
		6週	高次構造2 (結晶構造)			結晶構造の形と分類が説明できる		
		7週	高次構造2 (結晶構造) 続き			球晶の発現する理由や結晶化度の測定方法について説明できる		
	8週	高分子の熱的性質			融点やガラス転移点の意味、耐熱性の設計方針について説明できる			
	2ndQ	9週	高分子の力学的性質			引張変形や粘弾性データより高分子の力学的性質を評価できる		
		10週	ゴム男性			エントロピー弾性の意味を説明できる		
		11週	ラジカル重合1			開始剤の役割、重合の特徴や素反応を説明できる		
		12週	ラジカル重合2			重合速度に及ぼす開始剤濃度やモノマー濃度の影響を理解する		
		13週	イオン重合1			アニオン重合やカチオン重合の特徴を説明できる		
		14週	イオン重合2			配位アニオン重合の特徴を説明できる		
		15週	重縮合、重付加、付加縮合			それぞれの反応の特徴を説明できる		
16週		期末試験						
評価割合								
	試験	発表	相互評価	態度	ポートフォリオ	その他	合計	
総合評価割合	70	0	0	0	0	30	100	
基礎的能力	0	0	0	0	0	0	0	
専門的能力	70	0	0	0	0	30	100	
分野横断的能力	0	0	0	0	0	0	0	